

不透明な世界のなかで

三嶋りつ恵「あるべきようわ」展

土方浦歌 評

無色透明のガラスと光と空気、そして白い壁。ただそれだけの要素なのに、こんなに深く心に残る時間となるのはなぜだろう。

地下に降りていく細い階段からそれは始まる。突きあたりの踊り場の一角には、縄で吊るされたガラスの渦が、私たちの視線を下へと吸い込む。その奥に目を転じれば、鈍い銀色の光沢を放つ不揃いの数珠状のガラスが、縦に連なりながら地階から現れる。さらに壁際に設けられた通路を進んでいくと、小さな聖なる空間に行きつき、パネル型の七面鏡の前に置かれた、ガラスの仏塔《パゴダ》が無限の映り込みをみせている。圧巻なのは中央の展示室だ。巨大な白い壇上に、20個のガラス作品が鎮座している。神々しく光を放つこれらの造形物を、最初は視線の上方に仰ぎ見ることになる。近づいて周囲のステップを上がると、今度は同じ目の高さになる。そのとき初めて、これらの作品がぼってりとした、どこか親しみのあるかたちであることに気付くのだ。

顕微鏡で見るとようなミクロの世界や太古の造形、自然現象……その形は実に様々だ。どろどろに溶けた蜂蜜状のガラスが、そうした原初的ないのちの動きと重なると、見たこともないようなかたちが誕生する。下からの光源によって、透明なガラスに劇的な陰影が入り、生物のようにうねり絡まる末端がより明らかになる。作家がこれまで追求してきた、有機的で豊かなボリュームのある造形に加えて、近年の作品は、露や石肌などを思わせるような表面の質感がより多様になったように感じられる。また、続く部屋に展示されている、鉱石のような多面体群《聖なる立体》や、磨きあげたミニマルな小品に到るまで、その密度と緊張感が変わらないことに驚く。

青木淳による会場構成は、私たちの視界を効果的に塞ぎ、あるいは解放しながら、上下自在に誘導する。順路の最後にある隙間をうかがえば、冒頭の銀色のガラスの数珠が上階へと延びていて、つまり、視線は再び来た場所に戻り一巡するのだ。白く塗られた木材や、手すりに貼られた布、砂のように敷かれた塩、用いられた素材は、どこかぬくもりを感じさせ、柔らかく光を散乱しガラスの輪郭を際立たせる。そして、会場内のそこかしこに漂う仄かな香りは、単色の空間に彩りをそえている。

ガラスの制作過程は、不測の出会いに満ちている。直接触れられない高温のガラスのたねに形をふきこむことができるのは、冷え固まるまでのわずかな時間であるという。ムラーノ島に千年以上も継承されてきた技法は、人の手わざがどこまでこの物質を操ることができるのかという試行の連続であるのかもしれない。作家は、

このような伝統的な工房に通い職人たちとのコラボレーションに打ち込んできた。そう考えると、展覧会タイトルとなった明恵上人の「あるべきようわ」という言葉は、他者や状況の不透明さを肯定し、それに対して、不断の情熱をもってはたらきかけていく、むしろ能動的な心のあり方なのではないか、というように思えてならない。積み重なった偶然から引き出された、ただひとつの必然。空間の隅々までいきわたる小さな決断の数々に、この展覧会もまた、あるべくしてかたちづくられたように思う。

初出：『美術手帖』2011年7月号（Vol.63, No.953, p.196-197）、美術出版社